The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 日本語の自律学習を支援するオンラインプラットフォーム「OU 日本語ひろば」の開発について |
| Author(s) | 義永, 美央子; 角南, 北斗; 瀬井, 陽子 他 |
| Citation | 多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2020, 24, p. 27-34 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/79091 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 日本語の自律学習を支援するオンラインプラットフォーム「OU 日本語ひろば」の開発について

義永美央子*・角南北斗†・瀬井陽子‡・難波康治§

**要　旨**

OU 日本語ひろばは、現在大阪大学国際教育交流センター日本語教育研究チームが企画・開発を行なっている、日本語学習支援のためのオンラインプラットフォームである。具体的には、日本語教材の検索や日本語学習リソースに関する情報提供を通じて、本学構成員の自律的な日本語学習を支援することを目標とする。本稿では、国際教育交流センター日本語教育研究チームのミッションおよび国際教育交流センターが提供する日本語教育プログラムの課題と対策について検討したのち、OU 日本語ひろばのサイト開発方針およびサイト構成について説明する。また、今後の方向性として、サイトの充実化と対面での学習支援との連携について述べる。

**【キーワード】**日本語教育、自律学習支援、オンラインプラットフォーム

## 1　はじめに

グローバルな人の移動が当たり前になる中、日本でも大学の国際化が喫緊の課題となっている。文科省が留学生30万人計画やスーパーグローバル大学創成支援事業といった取り組みを次々と打ち出す一方で、大学ランキングなどによって、世界レベルでの大学の序列化が進みつつある。多くの大学ランキングでは、外国人学生比率や外国人教員比率などで示される「国際性」が評価指標の１つの柱となっており、どの大学も、学生の送り出しや受け入れが重要な課題となるのに加え、受け入れた留学生への日本語教育に対する需要が高まっている。

大阪大学は学部・大学院あわせて約２万人の学生が在籍する大規模総合研究型大学であり、2,500人を超える留学生のほか、ポスドクや研究員、教員などにも外国人の方が多く、日本語学習ニーズを持つ人の背景は非常に多様である。国際教育交流センター日本語教育研究チームでは、これまで大阪大学に在籍する留学生対象の日本語の授業担当および日本語教育プログラムの企画・開発に加え、２週間から８週間程度の超短期プログラムで来日する留学生を対象とした日本語プログラムの企画・実施、学内で活動する日本語ボランティア教室への助言、大阪大学の外国人研究者や家族等を対象とした日本語プログラムの企画・実施[1)]等、様々な業務に携わってきた。日本語教育に従事する教職員数や関連予算が頭打ち、むしろ抑制傾向にある昨今、限られた人的・物理的・経済的リソースを最大限に駆使して質の高い日本語教育や日本語学習支援を持続的に実施するためには、従来の教育活動とは一線を画した新しい取り組みの開発が求められる。

一方、インターネットおよびスマートフォンやタブレットといったモバイルデバイスの爆発的な普及を受け、言語学習のあり方にも近年大きな変化が生じている。青木（2016）はこのような新しい状況に対応するため、教師は学習者が教室の外から教室に持ってくる知識の存在を認めた上で、それをリソー

* 大阪大学国際教育交流センター教授
† フリーランス
‡ 大阪大学国際教育交流センター特任助教
§ 大阪大学国際教育交流センター准教授

スとして利用していく方法を考えなくてはいけないと主張した。さらに、その具体的な方策として、セルフアクセスとウェブリソースの利用への注目を促している。セルフアクセスとは、学習者一人一人が自分の学習に必要なリソースに自由にアクセスできるシステムをさす。またウェブリソースを利用し、学習者が簡単にリソースを探せるような検索システムの必要性も指摘されている。

このような課題を背景として、国際教育交流センター日本語教育研究チームでは、現在、「OU 日本語ひろば[2)]」という日本語学習ポータルサイトを企画・開発している。このサイトは、オンライン上で日本語学習に関する種々の情報を集約・整理した上で提供し、本学構成員の自律的な日本語学習を支援することを目標とする。本稿では、国際教育交流センター日本語教育研究チームのミッションおよび国際教育交流センターが提供する日本語プログラムの課題について検討したのち、OU 日本語ひろばのサイト開発理念およびサイト構成について説明する。また、今後の方向性として、サイトの充実化と対面での学習支援との連携について述べる。

## 2　国際教育交流センター日本語教育研究チームのミッション

本稿執筆者のうち、義永・難波・瀬井が所属する大阪大学国際教育交流センター（以下、本センター）は、2010年４月、従来の大阪大学留学生センターを発展改組し設立された。学内共同利用組織として、2,594名（2019年５月１日現在）を数える本学留学生に対する日本語教育ならびに修学・生活上の助言、短期留学の受け入れ促進や一般学生の協定大学への短期留学促進などの業務を行っている。また、外国人留学生・研究者が地域社会および本学の日本人学生と触れあうための機会を多く提供し、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとする大阪大学の中で重要な役割を果たしている[3)]。本センターの中には日本語教育研究チーム、短期プログラム開発研究チーム、交流アドバイジング研究チームに加えて、来日予定の外国人研究者・留学生等のビザ申請や宿舎手配を支援するサポートオフィスがあるが、執筆者らはいずれも日本語教育研究チーム（以下、日本語チーム）の教員として日本語教育に従事している。

日本語チームの主なミッションは、本学に在籍する留学生への日本語教育、すなわち、正規学生（学部生・大学院生）および短期交換留学生に質の高い日本語教育プログラムを提供することである。またこれに加えて、研究生など正規の学生ではない大学構成員に対しても、生活の質の向上および進学後の研究生活の充実を念頭に置いた日本語学習支援を行っている（義永 2018）。

さらに、近年注目される日本語チームのミッションとして、学内・学外の日本語教育に関する人や組織、情報、リソース等をつなぐハブとしての機能がある。現在、大阪大学は吹田・豊中・箕面の３キャンパスを有し、それぞれのキャンパスに多くの部局が存在している。そして、いくつかの部局は、独自の日本語学習支援を実施している。それぞれの部局の特性やニーズに合った支援が行われるのは好ましいことであるが、本センターと各部局の間でお互いの情報が共有されにくいという課題もある。学内共同利用組織である本センターは、本学における国際交流のハブあるいは結節点として、日本語学習に関わる種々の情報を整理し、必要な人がすぐ容易にアクセスできるような形で提供することもミッションの一つであると考えられる。

## 3　国際教育交流センターが提供する日本語プログラムの現状と課題

本節では、大阪大学における日本語教育の現状と課題について「日本語学習者の量的拡大」、「日本語学習者の質的変化」、「日本語支援の多様化の必要性」の３つの観点から述べる。

### 3-1　日本語学習者の量的拡大

現在、大阪大学の中で日本語教育を主として実施する部局は、本センターと日本語・日本文化教育センターの２つの学内共同利用施設であるが、ここでは本センターが担当する日本語プログラムの概要を述べる。

現在、本センターが実施している日本語教育は、大きく分けて、「進学前予備教育」と「外国語としての日本語正規科目」および「在学中の日本語学習支援」の三つのカテゴリーに分けられる。「進学前予備教育」としての日本語プログラムは、学部入学前予備教育と大学院入学前予備教育の２つに分けられ、前者は日本語・日本文化教育センター、後者を本セ

ンターが担っている[4)]。

「外国語としての日本語」としては、まず全学共通教育科目として、学部正規留学生に対する外国語科目としての日本語科目群（総合日本語・専門日本語・多文化コミュニケーション）、および、インターナショナルカレッジ英語コース学生のための共通教育科目（日本語）を提供している。また、短期留学生を主な対象とする科目群として、国際交流科目の総合日本語（JA100～500）およびグローバル理解演習（JGU600：内容言語統合型の上級クラス）がある。さらに、国際交流科目には、夏期、冬期休業中に行われる種々の超短期日本語プログラムもあり、これらのプログラムの数が近年増加している。一方で、大学院での研究活動に必要とされるアカデミックな日本語の習得が求められる学生もおり、大学院生を対象とした学際融合教育科目も提供している。

上記の「外国語としての日本語」として言及した科目はいずれも正規科目であり、所定の条件を満たして学習を修了すると単位が付与されるが、「在学中の日本語学習支援」は、単位を付与しない非正規科目として提供している科目群を指す。これらの科目群は「留学生日本語プログラム（選択コース）」と呼ばれ、現在は初級から中級の総合コース（3レベル）と漢字クラス、そして、中・上級および上級の専門コース（アカデミック・コミュニケーション、アカデミック・リーディング、アカデミック・ライティング）およびビジネス日本語クラスを吹田キャンパスにて開講している。

このように、多様な属性を持つ留学生に様々な日本語科目を提供しているわけであるが、近年、受講者の総数が急増している。本センターにおける日本語プログラムの受講学生数をみると、2010年度までは年間300名前後で推移していたのに対して、2011年度以降急激に増加し、2019年度には約900名に達している。つまり、10年弱の間に受講者数が約3倍になっているのである。短期留学生数の増加に伴い、特に国際交流科目の日本語クラス（JA・JGU）の受講者増が著しく、現在は年間約450名にのぼる。これは、国際教育交流センターで実施されているすべての日本語科目受講者の半数に達する人数である。

### 3-2　日本語学習者の変化

近年の日本語プログラム履修学生については、その人数の増加とともに、質的な変化も見て取れる。

1つは、初めて日本語を学ぶ学習者の増加である。特に短期留学生では、従来の過去4年間、初習学習者の割合が、国際交流科目日本語（JA・JGU）受講者総数の40％以上に達しており、それに対応するために多くのクラスを並行して開講している。従来は来日前にある程度の日本語学習を経験して留学する学生が多かったのに対し、そうした準備をあまりしないままに来日する留学生が増加したと考えられる。

2つめの変化は、日本語を正式な授業ではなく、自学自習で学んできた留学生の増加である。インターネットの発展とともに、日本語を学習しようとすれば、ウェブ上で多くのリソースを見つけることができるようになった。実際に、YouTube上でドラマやアニメ、またはレッスンの動画を視聴することで、一定の日本語能力を身につけている学習者は年々増加している。授業という形ではなくても日本語を自ら学ぶことが可能となっているのである。彼らのような学習者は、必ずしも学習を意識して行っているわけではなく、日本語を用いた動画の視聴等を楽しんだ結果として知らず知らずのうちに日本語を身に付けている場合も少なくない。その日本語能力も音声言語のみの学習や、特定の言語ジャンルのみの習得など、従来の学習者のそれとは異なった特徴がある。

### 3-3　日本語教育・学習支援の多様化の必要性

以上、学習者が量的・質的に変化してきたこと、それに伴い、従来の日本語プログラムが複雑化してきた経緯を述べてきた。これら多様化する学習者に対応して、日本語教育・学習支援のあり方自体も変化させていく必要があると考えられる。

その一つは、来日前から在学中、そして大阪大学を離れた後までを考慮に入れ、時間軸にそった日本語学習機会を提供する必要性である。現在、本センターは在学中の留学生および短期交換留学生のための日本語教育と、進学前の一部の学生を対象とした予備教育を実施している。また近年、留学生の日本での就職支援が課題となっているが、留学生のキャリア形成に資する日本語教育として、2017年度より「ビジネス日本語コミュニケーション」（留学生日本語プログラム（選択コース））および「キャリアデザインとビジネス・コミュニケーション」（学際融合教育科目）を開講している。これらに加えて、来日前から大阪大学での日本語プログラムについて知り、

さらに一定の日本語の基礎を身につけておけるようにできれば、留学の質の向上に役立つであろう。このような、「入り口から出口」に渡る時間軸に沿った日本語学習支援の仕組みをつくる必要がある。

もう一つは、留学生というカテゴリーに該当しない大学構成員への支援の必要性である。大学の国際化に伴い、大阪大学に所属する外国人研究者、あるいは日本語非母語話者の教員などの人数も増加しており、それらの構成員への日本語支援も求められている。しかしながら、財政的な事情もあり、従来本センターで行ってきた外国人研究員や家族等に対する日本語プログラムの提供は、現在は行われておらず（義永・小関・鹿島 2015）、吹田キャンパス・豊中キャンパスにおけるボランティアグループの交流活動（「日本語テーブル」）について、場所の提供や活動への助言などを行っているのみである。こうした留学生以外の構成員への支援も今後充実が望まれる。

また、キャンパスが3つに分かれる中、各自の部局での研究・学修活動と並行して日本語の教育プログラムに参加することに困難を感じる学習者もいる。こうしたアクセスの問題を解消し、わざわざキャンパスを移動して教室に来なくても日本語学習が可能になるような環境構築も必要とされている。

## 4　OU日本語ひろばの開発方針とサイト構成

これまで述べてきたように、大阪大学における日本語教育は多様化・複雑化しており、教育プログラムおよび学習支援のさらなる充実や部局間の連携が今まで以上に求められるようになっている。

本節では前節で指摘した課題への一つの対策として、本センターで現在企画・開発を行っているOU日本語ひろばの開発方針と現在のサイト構成について述べる。

### 4-1　開発方針

「OU日本語ひろば」の開発の基本方針は、以下の3点である。

①　リアルとヴァーチャルを結ぶ
②　既存のリソースを最大限利用する
③　スマートフォンでのアクセスを前提とする

#### ①　リアルとヴァーチャルを結ぶ

本号別掲の報告、および本稿5-2でも言及するセルフアクセスセンター（OUマルチリンガルプラザ）が今後大阪大学各キャンパスに設置される予定であるが、OUマルチリンガルプラザは本学構成員の自律的な言語学習とともに、多言語・多文化交流を支援するための場所であり、今後の本学構成員の言語学習のハブとなることが期待されている。OUマルチリンガルプラザでは、言語学習に関する種々の情報提供に加えて、学生中心のプロジェクトや言語学習に関するアドバイジングなど、様々なアクティビティが行われる予定である。その中で行われることになるさまざまな日本語関連アクティビティへの、利用者のアクセスを促進することが、私たちがOU日本語ひろばに期待する機能である。

また、従来型の授業についても、上に述べたようにより容易なアクセスが必要とされている。そのため、OU日本語ひろばを通して日本語のレベルチェックや授業選択のガイダンスを行い、日本語プログラムへのアクセスと学生の適正配置のための補助を行うこともOU日本語ひろばに期待される機能である。

このように、「リアルとヴァーチャルをつなぐ」ことで日本語学習者が自律的に学ぶための支援を行い、授業とは異なる形で日本語教育チームのミッションに寄与するもう一つのハブとなることが、OU日本語ひろばの基本方針である。

#### ②　既存のリソースを最大限利用する

本センターでは、実施している日本語プログラムの補助として、あるいは学習者のニーズに対応して、これまでさまざまな学習リソースを開発してきた。しかし、これらの学習リソースの開発には、かなりの費用的・時間的負担が発生するため、すべてを独自に開発し、維持することは困難になっている。

一方で、従来型の紙ベースの教材や参考書に加えて、ウェブ上の学習リソースも年々増加している。ただし、それらはしばしばクローズされたり、URLが変更されたりして、安定した提供が保証されていない。また、リソースへのアクセス方法や置かれたサーバーなどが様々であり、連携しにくい状況があった。さらに、せっかく優れたリソースが開発されていても、その存在が広く知られておらず、必要とする人のところに届かない場合もある。

そのため、OU日本語ひろば上でそれらを整理して紹介することで、多くのリソースの有効利用を図りたいと考えている。つまり一から創りあげるのではなく、これまで積み上げられてきながらそれぞれ

連携がなく、あるいは知られていなくて十分に機能してこなかった様々なリソースへのアクセス性を高め、有効活用できるようにするのである。こうした日本語学習リソースのキュレーションを適切に行うことが、日本語ひろばの２つ目の方針である。

**③　スマートフォンでのアクセスを前提とする**

ヴァーチャルなアクセスは、「いつでも、どこでも」できることが必要である。現在、学生のほぼ全員がスマートフォンを所持する一方で、PCへのアクセスは少なくなっているという現状がある。スマートフォンの利用実態を見ると、１日にスマートフォンを利用する時間としては「2時間以上3時間未満」が最も多く（2018年版スマートフォン利用者実態調査）、10代と20代では、スマートフォンで「SNSを見る・書く」時間や「動画投稿・共有サイトを見る」時間が他の世代と比べて多くなっている（平成29年版情報通信白書）。このような使用実態に即したコンテンツの提供も必要であると考え、短い動画を用いたコンテンツなどを企画している（5-1参照）。

以上のような方針のもと、開発の第一段階として、OU日本語ひろばには、次節で紹介するような３つの機能を搭載することにした。これらの機能は、構想している「リアルとヴァーチャル」統合のうちの一部に過ぎないが、現段階で実現可能な機能を厳選して、まずは稼働させてみることが重要であると考えた。

### 4-2　サイトの構成

サイト「OU日本語ひろば」は、大きく３つのコンテンツで構成される。

１つ目は「教室をさがす」というコンテンツである。これは、日本語を学びたい利用者に向けて、本センターが提供する日本語教育プログラムだけでなく、学内の各部局が提供している日本語教室や、チューターやボランティアなどの日本語学習支援の取り組みを紹介するものである。そのほか、学外の近隣地域で実施されている日本語教室についても、その内容や場所、開かれている時間などを一覧にまとめたものを公開している。

２つ目は「相談する」。日本語学習に関する質問や相談を受け付けるために、オンラインフォームを設置している。これを使って送信された内容は、本センターの関係者にメールの形で届く仕組みになっている。

３つ目は「教材をさがす」で、これは大阪大学総合図書館（豊中キャンパス）の留学生図書に配架されている日本語学習教材を検索できるコンテンツである。書名や出版社名、著者名などを対象にしたキーワード検索だけでなく、レベル（初級・初中級・中級・上級）やジャンル（漢字・アカデミックジャパニーズ・JLPT）といった切り口で検索することもできるようになっている。特定の教材をピンポイントで探すようなケースではなく、自身の日本語レベルや関心テーマに合った教材を探したいケースでは、キーワード検索だけでは目的を達成しにくい。キーワードを思いつくこと自体が難しいうえ、書名にそのキーワードが含まれていなければ抽出できないからである。そこで、日本語教育の専門家が実際の教材を確認して分類し、その分類に応じたラベルをデータに付与することで、こうした検索ができるようにしてある。加えて、一部の教材には紹介文も独自に追加しており、これも適切な教材選びのための工夫のひとつだといえる。

サイト全体としては、日本語と英語が用意されており、トップページで選択するだけでなく、任意のページでも自由に切り替えられるよう設計されている。これは、最初からマルチリンガルな情報発信に対応できるようなシステムである点が大きい。あらかじめ想定されたフォーマットのページであれば、運用スタッフが簡単にそれぞれのページを追加でき、運用コストも大幅に下げられる。

また4-1でも述べたように、近年はサイトの閲覧に使う主要なデバイスがPCからスマートフォンに移っており、小さな画面でもある程度見やすく、操作しやすいサイト設計であることは、もはや必須条件と言えるだろう。本サイトの制作にあたっても、全般的にスマートフォン対応は考慮されているが、特に情報量の多い「教材をさがす」をどうするかは大きな議論となった。例えば「みんなの日本語」のような多巻構成・副読本を持つ教材などは、同一シリーズで検索結果が埋まってしまい、とりわけスマートフォンでは見通しが悪くなる。そこで、検索直後はシリーズを１つにまとめてコンパクトに表示させ（図1）、ボタンをクリックすると関連する教材をリストで表示する（図2）という開閉式のナビゲーションを採用した。

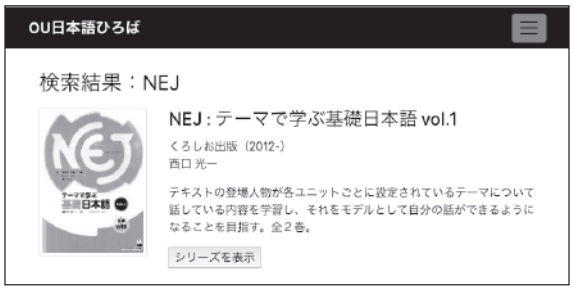


図１　シリーズが折りたたまれた状態

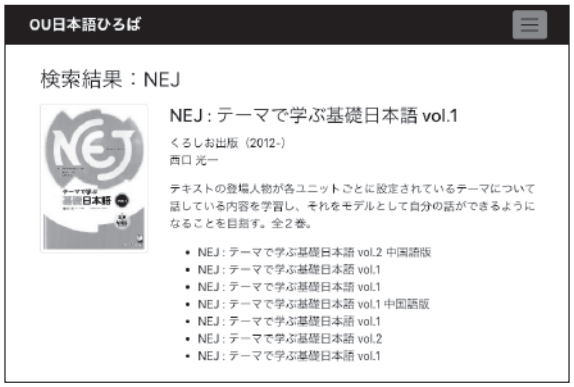


図２　シリーズを展開した状態

## 5　今後の方向性

### 5-1　サイトの充実化

OU日本語ひろばのサイトはまだまだ開発途上であり、現在公開している「教室をさがす」「相談する」「教材をさがす」の３つのコンテンツをさらに使いやすいものにしていく必要がある。例えば現在、学外の日本語教室の一覧はpdfファイルへのリンクを載せているのみであるが、希望する地域や教室の開講曜日・時間などから容易に検索が可能になるようなシステムの構築が求められる。また、教材検索についても学習者がどのような教材を、どのようなキーワードでよく検索するか等についての追跡調査が必要であろう。それに加えて、今後OU日本語ひろばに搭載したいコンテンツとしては、以下のようなものがある。

**①　動画による情報提供**

4-1でも述べたように、特に10代20代を中心とする若い世代のスマートフォン利用用途は多様であり、とりわけ動画投稿・共有サイトを見る時間が長い傾向がある。OU日本語ひろばの利用者は、学生、すなわち若い世代が中心となるため、そうした世代の利用状況に即したサイト開発が必要になる。

こうした背景を踏まえ、現在、学習者自身が実際に使って良かった教材やアプリ、学習方法などを紹介する短い動画を作成し、OU日本語ひろば上で公開することを検討している。こうした動画では、主として日本語学習者自身が紹介者として登場する。動画を準備し投稿することそのものが一つのオーセンティックな日本語使用の場となるのに加え、利用者（日本語を学習する視聴者）は、動画投稿者をある種の身近なロールモデルとして参考にすることができるだろう。

**②　eポートフォリオの開発**

教室外での自律的な学習において、しばしば問題となるのが継続性の問題である。最初は高い動機付けのもと、時間をかけて様々な課題に取り組むものの、そうした積極的な学習姿勢がなかなか継続できないという声をよく聞く。また、教室で学ぶ学習者にとっても、自分がどのような言語学習を行い、どのような学びや変化を経験したのかを振り返る時間を取ることは重要であろう。

近年、学習活動の記録や成果物などを収集・整理し、振り返りや評価、今後の学習計画策定の材料とするポートフォリオへの注目が集まっている。また、それらをインターネット上に蓄積するeポートフォリオについても、様々な科目や教育機関での実践が報告されている。

現在、本センターではオンラインでの日本語レベルチェックのサイトを公開しているが[5)]、将来的にはこれを発展させる形で、学習者個々の学習の過程を記録・整理できるeポートフォリオをサイトの中に組み込みたいと考えている。

### 5-2　対面での学習支援（SALC）との連携

ここまで説明してきたオンラインでの日本語学習支援に加えて、本節では、現在、大阪大学マルチリンガル教育センターと連携し準備している対面での学習支援環境の整備、特にセルフアクセスセンター（Self-Access Learning Center、以下SALC：言語学習に関するリソースの紹介や言語学習アドバイジングの実施等を通して、学習者自身による自律的な学習の実施・継続を支援することを目的とした施設）の企画について紹介する。

マルチリンガル教育センターは、英語他26言語の全学教育を開発・実施するための一体的・持続的な組織として2018年４月に創設された。この組織強化

に基づいた言語教育の開発・実践により、英語のみならず世界の諸言語と日本語に関する先進的な教育法と教育システムを構築し、グローバロゼーション時代における我が国の多言語教育のモデルを確立することが目指されている[6)]。現在、マルチリンガル教育センターでは全学の共通教育の改革に加え、高度専門英語教育プログラムの開発、英語プレゼンテーション力を伸ばす教育サービスの導入等に取り組んでいるが、これに加えて、セルフアクセスセンター「OU マルチリンガルプラザ」の設置についても準備を進めている。

OU マルチリンガルプラザは、将来的には豊中・吹田・箕面の各キャンパスへの設置を予定しているが、2020年度はまず豊中キャンパスでの開設を目指している。特色としては、留学生等の日本語学習支援、そして英語学習支援のみならず、外国語学部を有する唯一の国立総合大学の強みを生かし、複数言語の学習を支援する場の構築を目指していることが挙げられる。本学には、2,500人を超える留学生に加え、世界の25言語を専攻する学生や、日本語教育を専攻する学生、さらに、理系文系問わず、言語学習に関心を持つ学生が在籍している。そうした学生がOU マルチリンガルプラザを利用し、様々な言語や文化に関心を持つ人が相互に交流し、学び合う場になることが期待される。

SALC は、海外では1960年頃から、日本では2000年以降に大学などの教育機関で設立されるようになり、施設としてどうあるべきかが議論されてきた。しかし、昨今セルフアクセスを取り巻く環境が大きく変化している。Mynard（2016）は、従来SALC は学生が言語学習リソースにアクセスできる場としての機能を果たしていたが、学習者がオンラインで複数の学習リソースにアクセスできるようになったことから、実在の場、つまりSALC に来ることが利用者にとってどのような意味を持つのかを各教育機関で探る必要があると述べている。そのうえで、これからのSALC に必要な機能として、学生のコミュニティ、つまり同じ言語を学ぶ学生同士や、ある言語を学ぶ学生と学習言語を話す話者とのコミュニティを作るための環境整備があるとも述べている。このことから、これからのSALC の形として、オンラインと実在の場の役割を意識し、連携を取ることは重要であると言える。

現在オンラインでの教室案内と教材提供、学習についての相談をOU 日本語ひろばが担っている。実在の場としてOU マルチリンガルプラザが開設されれば、今後は対面での日本語学習支援が可能となり、日本語学習のためのコミュニティ構築の足掛かりにもなる。オンラインと実在する場、それぞれの特徴を生かし、連携を取りながら学習支援体制を整備することがこれからの課題である。

## 6　おわりに

本稿では、国際教育交流センター日本語教育研究チームが企画・開発を行っている日本語自律学習支援のためのプラットフォーム「OU 日本語ひろば」の開発の背景と現状について報告した。

本稿のはじめで述べた通り、インターネットやモバイルデバイスの爆発的な普及によって、学習のあり方は急激に変化しつつある。教室に行かなくても様々なリソースやツールが手に入り、学習者が生涯に渡って主体的・自律的に学ぶことがより容易になってきている反面、教室外で自分で学ぶ場合には、大量のリソースのどれが自分に合っているのかがわからない、あるいは、学習が継続できない、といった状況もしばしば生じると考えられる。

こうした状況に対応するためには、教室外での学習を完全に学習者に委ねるのではなく、必要かつ適切な情報やリソースへのアクセスを容易にしたり、必要に応じて相談や交流ができたりするような、学習を支援する場を構築する必要がある。今後も日本語学習・教育を取り巻く状況は大きく変化していくと予想されるが、これからの日本語教育の専門家には、教室外の自律学習を適切に支援するための環境をデザインする力が必要となるのではないだろうか。本稿で紹介した「OU 日本語ひろば」は、そうした目論見に基づく企画である。

**注**

1）現在、このプログラム（いちょう日本語プログラム）は休止している。本稿 3-3 および義永・小関・鹿島（2015）参照。

2）OU 日本語ひろばの URL は、2020 年 3 月現在 https://ou-hiroba.jp/ であるが、近日中に http://hiroba.ciee.osaka-u.ac.jp に変更予定である。

3）ここに記した国際教育交流センターの概要は、国際教育交流センターウェブサイト内の「センター紹介」の記述に基づくものである（http://ciee.osaka-u.

ac.jp/about/　2020年2月20日確認)。

4) 本センターでは現在、大学院研究留学生(国費留学生)を主な対象とする予備教育(日本語集中コース)に加えて、日韓理工系学部留学生(KOSMOS)プログラムの留学生に対する予備教育も実施しているが、本事業は2019年度の第2次第10期生をもって留学生の受け入れを停止する予定である。

5) 日本語レベルチェックのURL:http://nava.ciee.osaka-u.ac.jp/sim_levelcheck/(2020年2月20日確認)

6) ここに記したマルチリンガル教育センターの概要は、マルチリンガル教育センターウェブサイト内の「マルチリンガル教育センター(Center for Multilingual Education)とは」の記述に基づくものである(https://www.lang.osaka-u.ac.jp/cme/?page_id=81 2020年2月20日確認)。

## 参考文献


青木直子(2016)「21世紀の言語教育──拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性──」『Journal CAJLE』17, pp.1-21.

MDD研究所(2018)『2018年版スマートフォン利用者実態調査』https://mmdlabo.jp/investigation/detail_1760.html(2020年2月20日確認)

総務省(2017)『平成29年度情報通信白書』https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/index.html(2020年2月20日確認)

義永美央子(2018)「オンライン自律学習支援サイト『OU日本語ひろば』の構想について」第11回大阪大学専門日本語教育研究協議会報告書

義永美央子・小関祐子・鹿島実夢(2015)「『いちょう日本語プログラム』活動報告──外国人研究者および外国人配偶者向け有料日本語プログラム──」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化共生と留学生交流』第19号, pp.95-102.

Mynard, J. (2016). Self-access in Japan: Introduction. *Studies in Self - Access Learning*, 7(4), pp.331-340.


## 付記


本稿は、JSPS科学研究費補助金(基盤C)「大学における日本語自律学習支援者養成プログラムの開発」(課題番号19K00708)の成果の一部である。